連載：現代管情報シリーズ

中国・曙光電子 6L6-G(350C)

都来往人

はじめに

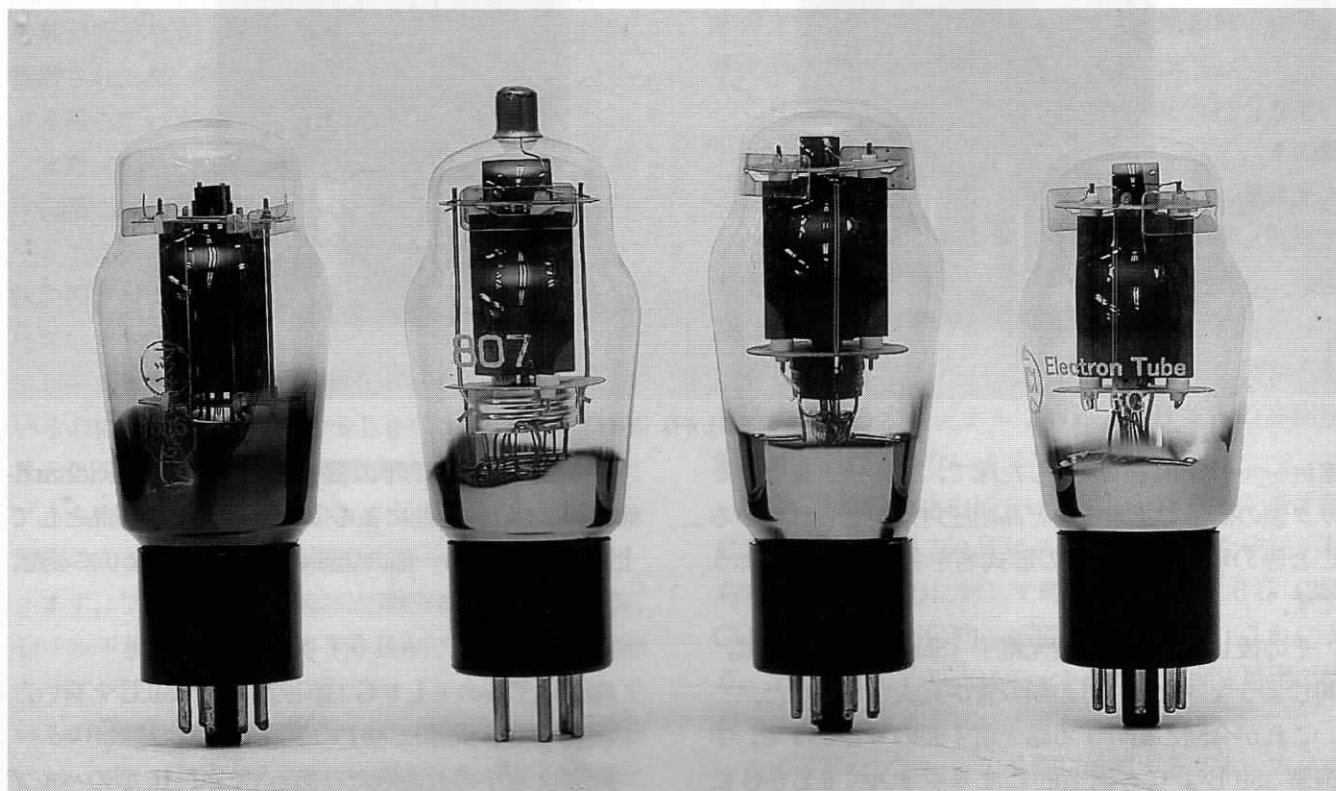
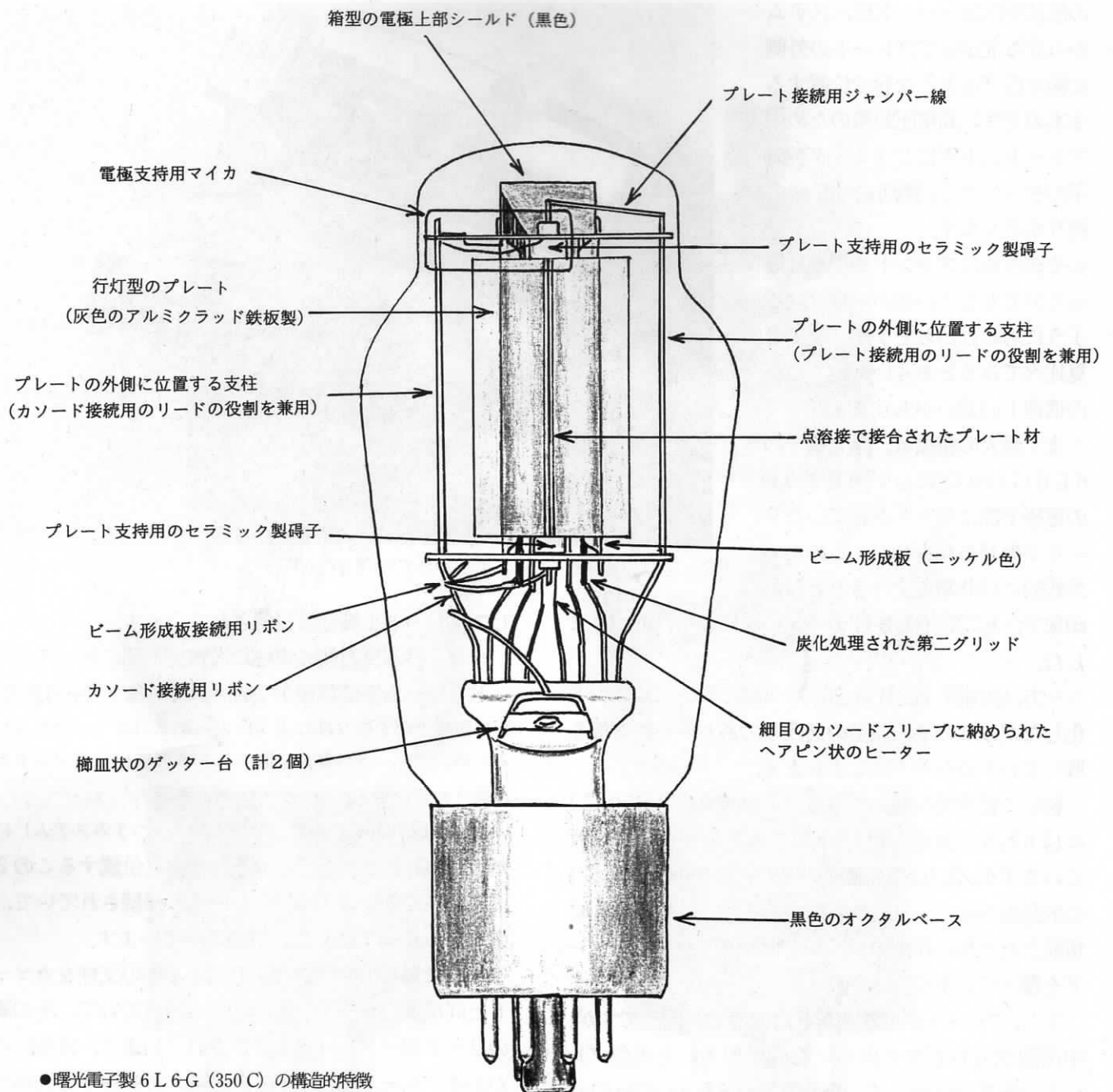
中国最大の真空管メーカー：曙光電子（Shuguang）では様々なタイプの6L6系出力管を製造しています．

一番良く知られているものとしては，通常ST管型の中国製6L6GCとしてお馴染みのST-14型バルブの6L6GC-J（原型名：6P3P）があります．

その他にもGT管では6L6GC-RやGC-M，GC-P，6L6WGB，5881，KT66等があります．

また，大型のST管としてはST-16型バルブのFU-807（807の中国版）が以前から製造されています．

さて，90年代初頭になると，ライバル・メーカーであった柳州（Liuzhou）の製造による350BがGolden-Dragonブランドから発表されました．

このGD-350Bはオリジナル：WE-350Bの復刻版ではなく，6L6の高耐圧/送信管バージョンである807をシングルエンド化(＝プレートの引き出し線を管頂

●外観を比べる．左よりマツダ6L6G，807，曙光電子6L6G，今回紹介するCCI 6L6-G

●曙光電子製６Ｌ6-G（350 C）の構造的特徴

子の６Ｌ6-G(350 C)の電極構造は，管頂部の箱型シールドを除けば，戦後間もない頃の国産６Ｌ6-G(マツダ等）によく似ているので，少し懐かしい気がします．

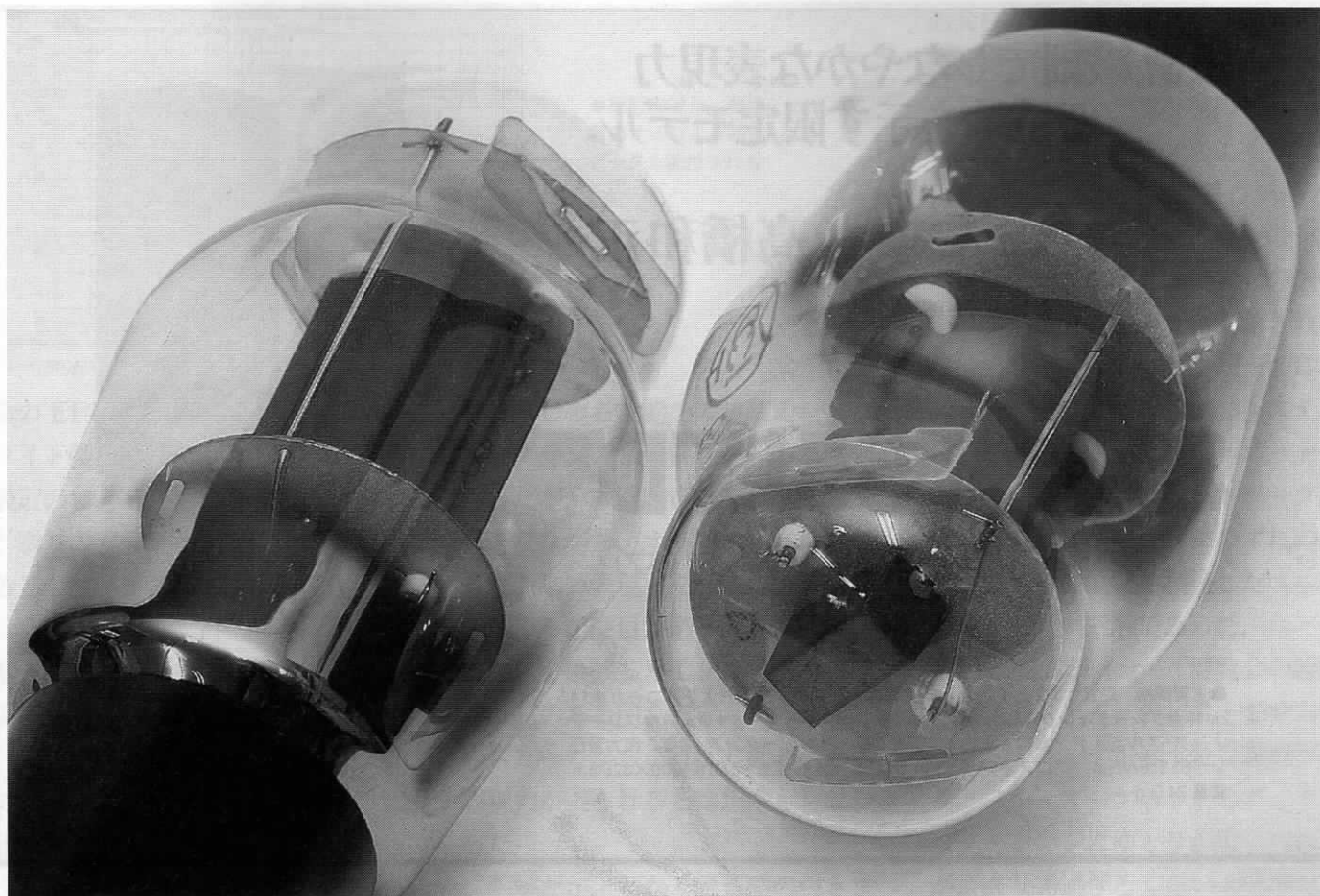
なお，中国製 350 Ｂも曙光電子の６Ｌ6-G（350 C）もＧ２は耐損失を稼ぐために黒く炭化処理されています．これは他の中国製６Ｌ６に共通した隠れた特徴のひとつでもあります．

電気的特徴

曙光電子の６Ｌ6-G(350 C)も他の中国製真空管と同様に規格が公表されていないため電気的な特徴は今のところよくわかりませんが，中国製 350 Ｂと基本構造はほとんど変わらないため，外見で判断する限り，中国製 350 Ｂや米国系６Ｌ6-Gと同じ条件で使えるのではないかと思われます．

ヒータはオリジナル：WE-350 Ｂが 6.3 V/1.6 Ａなのに対して中国製 350 Ｂも曙光電子の６Ｌ6-G(350 C）も 807 や６Ｌ６と同じく 6.3 V/0.9 Ａです．

これは両者とも 807 をシングルエンド化した改造品種であるためです．

いずれにしてもオリジナル：WE-350 Ｂとは構造的に大きく異なることから，音質的なキャラクターも異なると思いますので，むしろ６Ｌ6-Gの代替品として使用する方がよろしいのではないかと思います．

●オーソドックスな作りで信頼できそうだ

まとめ

以上のことから，曙光電子の６Ｌ６-G(350Ｃ)は807を原型とする中国製350Ｂの親戚のような球ではありますが，807の名残である電極下部にセットされたシールド板がない分，中国製350Ｂよりもオリジナルの米国系６Ｌ６-Gにより近いイメージを持っています．

ただし，プレートの外側にはヴィンテージ期の807によく見られる２本の支柱が伸びていますが，このような構造は戦後間もない頃のマツダ等の国産６Ｌ６-Gに見られたことから，懐かしくもあり，私にとってはそんなに違和感はありません．

もともと中国製350Ｂはオリジナル：WE-350Ｂとはかなり違った構造の球ですが，私が想像するに350Ｂの命名の由来は，プレートをセラミック製の碍子で支持するなど，従来の中国製６Ｌ６GC(ST 14型：曙光電子の正式型番は６Ｌ６GC-J/６Ｐ３Ｐ)をグレードアップした球ということで，６Ｌ６系のスペシャル管である銘球350Ｂの名前にあやかったものと思われます．

しかしながら350Ｂを名乗っても中国製350Ｂは807の亜流のイメージを払拭できなくて，わりと地味な印象の球です．

これは中国製350Ｂが開発された90年代初め頃までは既存の品種を改造して新製品を開発する手法が多かったという事情にもよります．

また，従来から生産されている中国製６Ｌ６GC（６Ｌ６GC-J）にしても，この球はST-14型の小型バルブでベースも短いため，小柄すぎてちょっと物足りなさを感じます．

けれども，ST-16型の曙光電子の６Ｌ６-G（350Ｃ）は，電極上部の箱型のシールドやステムから立ち上がった２本の支柱など，まだ原型の807の名残りがありますが，現行製品の６Ｌ６では最もオリジナル６Ｌ６-Gに近いイメージの球なので，レトロ調？　の新しいユニークな製品ではないかと思います．

最近はオリジナルの６Ｌ６-Gがますます入手困難となってきましたので，気軽に使える代替品のひとつとして，興味を惹かれた次第です．

今のところ曙光電子の６Ｌ６-G(350Ｃ)は，秋葉原の真空管商社よりCCIブランドで販売されているものが一般的に入手しやすいと思います．